

【旧約聖書日課】 エステル記 4章10節～5章8節

4¹⁰ エステルはまたモルデカイへの返事をハタクにゆだねた。¹¹ 「この国の役人と国民のだれもよく知っていることおり、王宮の内庭におられる王に、召し出されずに近づく者は、男であれ女であれ死刑に処せられる」と法律の一条に定められております。ただ、王が金の笏を差し伸べられる場合にのみ、その者は死を免れます。三十日このかた私にはお召しがなく、王のもとには参っておりません。」¹² エステルの返事がモルデカイに伝えられると、¹³ モルデカイは再びエステルに言い送った。「他のユダヤ人はどうであれ、自分は王宮にいて無事だと考えてはいけません。¹⁴ この時にあたってあなたが口を開きしているなら、ユダヤ人の解放と救済は他のところから起こり、あなた自身と父の家は滅ぼされるにちがいない。この時のためにこそ、あなたは王妃の位にまで達したのではないか。」¹⁵ エステルはモルデカイに返事を送った。¹⁶ 「早速、スサにいてすべてのユダヤ人を集め、私のために三日三晩断食し、飲食を一切断ってください。私も女官たちと共に、同じように断食いたします。このようにしてから、定めに反することではありますが、私は王のもとに参ります。このために死ななければならないのでしたら、死ぬ覚悟しております。」

¹⁷ そこでモルデカイは立ち去り、すべてエステルに頼まれたとおりにした。
5¹ それから三日目のことである。エステルは王妃の衣装を着け、王宮の内庭に入り、王宮に向かって立った。王は王宮の中で王宮の入り口に向かって王座に座っていた。² 王は庭に立っている王妃エステルを見て、満悦の面持ちで、手にした金の笏を差し伸べた。エステルは近づいてその笏の先に触れた。³ 王は言った。「王妃エステル、どうしたのか。願いとあれば国の半分なりとも与えよう。」⁴ エステルは答えた。「もし王のお心に適いますなら、今日私は酒宴を準備いたしますから、ハマンと一緒ににお出ましくください。」⁵ 王は、「早速ハマンを来させなさい。エステルの望みどおりにしよう」と言い、王とハマンはエステルが準備した酒宴に赴いた。⁶ 王はぶどう酒を飲みながらエステルに言った。「何か望みがあるならかなえてあげる。願いとあれば国の半分なりとも与えよう。」⁷ 「私の望み、私の願いはと申しますと」とエステルは言った。⁸ 「もし王のお心に適いますなら、もし特別な御配慮をいただき、私の望みをかなえ、願いをお聞き入れくださるのでございましたら、私は酒宴を準備いたしますから、どうぞハマンと一緒ににお出ましくください。明日、仰せのとおり私の願いを申し上げます。」

【使徒書日課】 使徒言行録 13章13～25節

¹³ バウロとその一行は、パフォスから船出してパンフィリア州のベルゲに來たが、ヨハネは一行と別れてエルサレムに帰ってしまった。¹⁴ バウロとバルナバはベルゲから進んで、ピシディア州のアンティオキアに到着した。そして、安息日に会堂に入って席に着いた。¹⁵ 律法と預言者の書が朗読された後、会堂長たちが人をよこして、「兄弟たち、何か会衆のために励ましのお言葉があれば、話してください」と言させた。¹⁶ そこで、バウロは立ち上がり、手で人々を制して言った。

「イスラエルの人たち、ならばに神を畏れる方々、聞いてください。¹⁷ この民イスラエルの神は、わたしたちの先祖を選び出し、民がエジプトの地に住んでいる間に、これを強大なものとし、高く上げた腕腕をもってそこから導き出してくださいました。¹⁸ 神はおよそ四十年の間、荒野で彼らの行いを耐え忍び、¹⁹ カナンの地では七つの民族を滅ぼし、その土地を彼らに相続させてくださったのです。²⁰ これは、約四百五十年にわたることでした。その後、神は預言者サムエルの時代まで、裁く者たちを任命なさいました。²¹ 後に人々が王を求めたので、神は四十年の間、ベニヤミン族の者で、キシユの子サウルをお与えになり、²² それからまた、サウルを退けてダビデを王の位につけ、彼について次のように宣言なさいました。『わたしは、エッサイの子でわたしの心に適う者、ダビデを見いだした。彼はわたしの思うところをすべて行う。』²³ 神は約束に従って、このダビデの子孫からイスラエルに救い主イエスを送ってくださったのです。²⁴ ヨハネは、イエスがおいでになる前に、イスラエルの民全体に悔い改めの洗礼を宣べ伝えました。²⁵ その生涯を終えようとするとき、ヨハネはこう言いました。『わたしを何者だと思っているのか。わたしは、あなたたちが期待しているような者ではない。その方はわたしの後から來られるが、わたしはその足の履物をお脱がせする値打ちもない。』

【福音書日課】マルコによる福音書 6章14～29節

¹⁴イエスの名が知れ渡ったので、ヘロデ王の耳にも入った。人々は言っていた。「洗礼者ヨハネが死者の中から生き返ったのだ。だから、奇跡を行う力が彼に働いている。」¹⁵そのほかにも、「彼はエリヤだ」と言う人もいれば、「昔の預言者のような預言者だ」と言う人もいた。¹⁶ところが、ヘロデはこれを聞いて、「わたしが首をはねたあのヨハネが、生き返ったのだ」と言った。¹⁷実は、ヘロデは、自分の兄弟フィリポの妻ヘロディアと結婚しており、そのことで人をやってヨハネを捕らえさせ、牢につないでいた。¹⁸ヨハネが、「自分の兄弟の妻と結婚することは、律法で許されていない」とヘロデに言ったからである。¹⁹そこで、ヘロディアはヨハネを恨み、彼を殺そうと思っていたが、できないでいた。²⁰なぜなら、ヘロデが、ヨハネは正しい聖なる人であることを知って、彼を恐れ、保護し、また、その教えを聞いて非常に当惑しながらも、なお喜んで耳を傾けていたからである。²¹ところが、良い機会が訪れた。ヘロデが、自分の誕生日の祝いに高官や将校、ガリラヤの有力者などを招いて宴会を催すと、²²ヘロディアの娘が入って来て踊りをおどり、ヘロデとその客を喜ばせた。そこで、王は少女に、「欲しいものがあれば何でも言いなさい。お前がやろう」と言い、²³更に、「お前が願うなら、この国の半分でもやろう」と固く誓ったのである。²⁴少女が座を外して、母親に、「何を願いましょうか」と言うと、母親は、「洗礼者ヨハネの首を」と言った。²⁵早速、少女は大急ぎで王のところに行き、「今すぐに洗礼者ヨハネの首を盆に載せて、いただきとうございます」と願った。²⁶王は非常に心を痛めたが、誓ったことではあるし、また客の手前、少女の願いを退けたくなかった。²⁷そこで、王は衛兵を遣わし、ヨハネの首を持って来るようにと命じた。衛兵は出て行き、牢の中でヨハネの首をはね、²⁸盆に載せて持って来て少女に渡し、少女はそれを母親に渡した。²⁹ヨハネの弟子たちはこのことを聞き、やって来て、遺体を引き取り、墓に納めた。

「洗礼者ヨハネを！」

主イエス・キリストのことを知ろうと願うならば、合わせて知っておくべき人物が少なからずあるようです。聖書に登場する多くの人物をすべて知ることは到底できないとしても、主イエスの後に従おうと願う者が知っておくべき存在として、初代教会以来、大切に教えられてきた人物が、幾人かいるのです。今日の福音書と使徒書が共に伝えている「洗礼者ヨハネ」は、その代表格でしょう。

「洗礼者ヨハネ」は、宣教活動を始められる前の主イエスに洗礼を受けた人物です。主イエスは、ほかの誰でもなく洗礼者ヨハネから洗礼を受けられることを自ら求められ、その公生涯の活動の始まりのしるしとされたのです。わたしたちが信仰の始まりのしるしとして洗礼を受けるのは、主イエスが御自ら洗礼者ヨハネから洗礼をお受けになられ、弟子たちにも「後に続く弟子たちに洗礼を受けるように」とお命じになられたからです。

けれども、洗礼者ヨハネが、わたしたち主イエスに従う者にとって憶えるべき人物となっているのは、単にわたしたちの洗礼の起源となっているからというだけの理由によるものではありません。洗礼者ヨハネは、洗礼と共に「悔い改め」を宣べ伝えました。そして、その「悔い改め」の先にお迎えすべき主イエス・キリストの先駆け、道備えとなったのです。

この洗礼者ヨハネは、実のところ、当時、主イエスをはるかに凌ぐ大衆的人気を誇る宗教家だったようです。時のガリラヤ領主ヘロデさえも敬意を払わないではいられない、ユダヤ人にとって偉大な霊的指導者だったのです。ところが、そのヘロデがヨハネを処刑しなければならなくなった。その経緯を伝える逸話が、今日の福音書で語られていることです。

ヘロデは、自らの誕生日の宴会の席で、踊りを披露した少女、妻ヘロディアの娘（伝承では「サロメ」の名で知られる）への褒美として、ヨハネの首を与えました。「欲しいものがあれば何でも言いなさい。お前にやろう」とヘロデは少女に約束し、「お前が願うなら、この国の半分でも」とさえ言っていたのです。そして、少女は、母ヘロディアに相談し「洗礼者ヨハネの首を」と願ったのでした。

それは、そもそもヨハネを憎んでいたヘロディアに言いくるめられてしまった結果でした。実際、少女は、与えられたヨハネの首を、そのまま母ヘロディアに渡してしまったと物語られています。けれども、もしかすると、少女は、ただ母親の言いなりになってしまった、というだけのことではないのかもしれませんが。少女自身にも、「洗礼者ヨハネ」を欲する思いがどこかにあって、母親の助言に乗せられてしまった、ということがあったのではないのでしょうか。

ヨハネは、当時、ユダヤ人社会の中で大変な人気を博した有名人でした。少女も、どこかでその名を耳にし、評判を聞き、そして、そのヨハネを自分自身のものにするのをどこかで願う思いが生まれていた、と考えるのも不思議ではありません。母親に「何を願いましょうか」と尋ね、「ヨハネの首を」と言われたとき、少女は、まさかヨハネの首だけが盆に載せられてくるとは思わなかったのではないのでしょうか。生きたヨハネが連れて来られ、自分の思いのままにヨハネと会うことができると、そう期待していたのではないのでしょうか。少女がそう思い込んでも不思議ではないほど、ヨハネは、名の知れ渡った存在だったのです。そうであればこそ、そのヨハネ亡き後に、同じような評判を博し始めた主イエスに対して、人々もヘロデも「ヨハネが生き返った」と思わざるを得なかったのです。

「期待しているような者ではない！」

わたしたちは、主イエス・キリストにこそ大きな期待を持ち、その主イエスと一つになることをさえ願う者です。他の者に期待するものではありませんし、どんなに親しい者との関係でも、それが主イエスとの結びつき以上のものとはなり得ない、ということさえ教えられています。

しかし、そうであっても、わたしたちは、実のところ、主イエスに近づくことをどこかでためらうところがあるのです。主イエスの不思議な力に初めて触れたシモン・ペトロが、「わたしから離れてください。わたしは罪深い者なのです」（ルカ 5:8）と訴えたように、わたしたちには、主イエスを信じながらも近づけない思い、主イエスの弟子とされながらも一歩離れようとする思いが、どこかにある。そして、主イエスの代わりに、もっと近づきやすい信仰者のモデルを探して、その人に近づこうとばかりするのです。「あの人のようになりたい」と。

洗礼者ヨハネを主イエスの先駆者として位置づけて来た教会は、しかし、そのヨハネの言葉をこう伝えたのです。「わたしを何者だと思っているのか。わたしは、あなたたちが期待しているような者ではない」。そして、ヨハネその人ではなく、ヨハネの指し示す人、主イエスにこそ目を向け、期待するように教えてきました。使徒言行録の伝えるパウロの説教の中でも語られている通りです。

「この時のためにこそ、あなたは…」

パウロはこのとき、バルナバと共に最初の宣教旅行に赴いていました。すでにキプロス島での宣教活動を終えて大陸に渡り、山岳地帯の町々に入って行った時の様子を伝えているのが、今日の使徒言行録です。

この場面で、使徒言行録は、洗礼者ヨハネとは別のヨハネのことにも触れています。そのヨハネは、宣教旅行の助手として連れられて来ていました(使徒 13:5)。ところが、その途上で一行から離れ、エルサレムに帰ってしまったというのです。実は、後に再びパウロがバルナバと宣教旅行を始めようとしたとき、このヨハネを連れて行くかどうかで意見が合わず、二人は別々の宣教団を組織して出発することになった(15:37~40)という、いわくつきの人物なのです。そのような人物が、なぜ詳しく伝えられているのか。それは、このヨハネが「マルコと呼ばれるヨハネ」(15:37)だったからです。マルコは、後年、パウロやペトロの宣教活動を大いに支え、ペトロ亡き後にはペトロの証言を元に一つの「福音書」をまとめ上げたと言いつた人物なのです。また、アレクサンドリアの教会の創始者として、現代にいたるまでギリシア正教会やコプト教会で憶えられてきた人物でもあるのです。

ヨハネ=マルコは、しかし、決して最初から褒められた人物ではなかったのです。むしろ、パウロやバルナバにとって厄介な存在、気まぐれで、仕事を途中で放り出してしまうような者でした。そのような者の姿を使徒言行録が敢えて伝えたのは、そのような者さえ、ふさわしい時にふさわしい形で神に用いられたのだ、という教会の理解があったからではないでしょうか。ヨハネ=マルコが心を入れ替えて立派な信仰者になったかどうかは、分かりません。しかし、その彼を用いてくださった神への信頼、神への期待は、揺るがないものがあったのでしょうか。

旧約の伝えるエステルの物語。ユダヤ人絶滅計画を阻止するために、ユダヤ人出身でありながら王妃となっていたエステルが、王に咎められ処罰される危険を冒して王に直訴した。そのエステルの決断の場面を描いた箇所です。この、ユダヤ教の祭り(プリム祭)の中で読まれてきた物語は、わたしたちが、神の大きな御計画の中でどのように用いられるのか、そのことに心を留め、自分をもっともふさわしく神に用いられることをこそ願うべきなのだと、教えてくれています。それは、わたしたちが「神に造られた者として、神の御計画の中で用いられるべき本当の自分をこそ欲し、願うこと」だと言ってもよいかもしれません。

ヘロデの前で、少女は、「神に用いられる本当の自分」を願い求める術を知らず、「ヨハネ」を求めてしまっていました。しかし、この少女もまた「本当の自分」を願い求める道を見出すべき、一人の迷える羊だったのです。

その道は、主イエスによって示されています。「主イエス」を願い求めるところで、わたしたちは「神に用いられる本当の自分」を願い求める道を見るようにされているのです。だからこそ、わたしたちは、洗礼者ヨハネと共に、ほかの誰でもない、主イエスをこそ指し示し続けます。そこにこそ、わたしたち自身が願い求めるべきもの、「神に用いられる本当の自分」を見出す道があるからです。